平成23年　元日

井戸庫和

📷：新年明けましておめでとうございます。

♪もういくつ寝るとお正月　お正月には凧揚げて　追い羽根ついて遊びましょう
いま日本は世界一の長寿国である。その平均余命数を更に押し上げる一人となりつつある。

一年の計は元旦にありと小学校でも教わり、それなりに決意もしてきたが、此処まで長く生きて居ると、お正月と言っても初詣もしなくなり、改まって年始挨拶に廻る先もなく、普段生活の延長で、ハレの気分はなくなってしまっている。
子供時代の正月は特に待ち遠しく、心のはずむ思いがあった。
指折り数え待ったのも、何歳頃迄だったろうか。

『お正月がござった』（わらべ唄）

お正月がござった
何処までござった
そこまでござった
何に乗ってござった
ゆずり葉に乗って
ゆずりゆずりござった

特に正月の遊びや行事は懐かしい思い出の一つである。
今は昔この日の学童は小学校へ行って祝賀に参列し、式典歌『一月一日』の歌を斉唱し、紅白の饅頭をもらい帰ったものである。
そこでこの文部省唱歌を掲げ、子供時代の正月気分でも味わってみよう。

『一月一日』（作詞：千家尊福　作曲：上 真行）

①としの　はじめ　の　ためし　とて
おはりなきよ　の　めでたさ　を
まつたけ　たてて　かど　ごと　に
いはう　けふこそ　たのし　けれ

②はつひ　の　ひかり　あきらけく
おさまる　みよ　の　けふ　の　そら
きみ　が　みかげ　に　たぐへつつ
あふぎ　みるこそ　たふと　けれ

この歌は、明治24年発行の小学校読本に掲載されていたものである。
第2節1行目からの「はつひのひかりあきらけく　おさまるみよの」は「初日の光り明らけく　治まる御代」と、明治の御代を表したもので、大正2年になって、以下のように改められたが、今日第1節は歌ってもこの2節はあまり歌われなくなっている。

②初日の光　さし出でて
四方に輝く　今朝の空
君が御影に　比えつつ
仰ぎ見るこそ　尊けれ

改めて新年のご挨拶を申し上げ、今後ともよろしくお願いいたします。

『将軍』七態

さて今回は北の大地、北海道に移住して迎える初の正月である。
まだ本格的な冬の寒さや、その厳しさを体験し終わってないので、雪や凍り道の歩行、自動車の運転にしてもかなり用心して、臆病で出無精になっている昨今である。
北海道に於けるこの『冬将軍』の威力は如何程かと、未だ測り兼ねている次第である。

その昔、極北の地モスクワやレニーグラードで、ナポレオンやヒットラーの軍勢に攻め込まれた冬のロシア軍には、苛酷な気象条件が味方し、辛うじて勝利した歴史がある。
この戦争戦略上に『冬将軍』が居たと言うなら、かっては日本軍から追われて、西へ西へと遥か重慶という奥地にまで兵を引いた蒋介石軍には、さしずめ『面積将軍』と言う強い味方がついていた事にもなる。

当時の日本軍には、無限に広がった奥深い支那大陸には手の施しようがなかった。
同様に後の大東亜戦争(この戦争を第二次大戦とは言っても、太平洋戦争とは呼ばない事にしている)にしても、更に広大な太平洋で同じ轍(ここでも『面積将軍』に敗退)を踏んでいるのである。
このいわゆる太平洋戦争(『マッカーサー将軍』が、敗戦国日本に押付けた彼らの戦争呼称である)に勝利したアメリカ軍も、その後の南北ベトナムに於ける戦闘では、ベトコン側に居た『密林将軍』によって手を焼き、一敗地にまみえるのである。

江戸時代末期(元治元年3月~11月)水戸の藩士、天狗党の面々が尊王攘夷を唱へ筑波山にて挙兵、下野、下総、常陸の各地で戦闘、更に主流(武士農民併せ八百余名)は上野、信濃、飛騨と中山道に転戦、越前にまで来たがここに力尽き加賀藩に降伏、結局は幕府追討軍によって鎮圧されるという悲劇が起きているのである。

すなわち勤王の旗揚げが数年早過ぎたために「天のとき」が、この水戸天狗党には味方せず、一同(三百五十余名)は北陸敦賀の地で斬罪にされ相果てるのである。
そしてその後に出てきた、薩摩長州の武士たちによる尊王攘夷論が『とき将軍』に助けられ、明治維新という無血に近い大革命を見事に成し遂げたのであった。

今から21年前(1989年 6月 4日)、北京の天安門広場で世界を震撼させた事件が起きている。
このとき民主化を求め立ち上がった中国の若者たちは、戦車を先頭にした自国共産軍の武装兵士から血の弾圧を受け、先に挙げた水戸の天狗党と同じ運命に見舞われ『時将軍』には完全に見放されているのである。
この時の民主化リーダーの一人に、昨年の秋ノーベル平和賞が授与されている。
このニュースを中国政府は全く無視し、授与国スエーデンを非難し、人民にはこの報道を規制しそんな事実は無かったことにしているのである。

この“弾圧行為は間違ってはいなかった”と、20年前の当時を総括した彼の国の最高指導者は言明し、更に日本や欧米人が信奉する民主主義なる制度を取り入れる意志は全く無く、今後とも一党指導態勢を堅持して行くとも言い切っているのである。
この国の人民側にもいずれ『時将軍』が現れるであろう、期待をもって見守るとしよう。

今日本と北朝鮮とは拉致問題で直接対立するも、その話し合いはおろか彼の国からは全く無視され、交渉の呼びかけ以外は何もできず、日本は此処でも、いつ到来するか判らない『とき将軍』を待ち続けるのみである。

そのうちに拉致被害本人及びその家族たちは日々齢を重ね、現世においてはその再会を果たすことが出来なくなりつつある。
一方この国は核の開発やミサイルの発射実験、韓国との武力衝突などを繰り返し、着々と成果をあげ、君臨する『偉大なる将軍様』が、その威力を国内外に発揮している。
さらに昨年は、44年振りに開かれたと言う朝鮮労働党代表会では、新らたに若き『三代目将軍』（大将の官位はまさに将軍そのものである）が誕生し、海外にも向けて披露されている。

日本はこのまま何も手が打てず、ただ『とき将軍』の出現を待つ事しかしない姿は、平和憲法とやらの枷、何ともやるせない敗戦後からの現実である。
ロシアによる不法占拠された北方領土や、竹島尖閣列島問題にしても、長い間を居座り続ける我が国の『無為無策将軍』により、何時到来するか判らない『とき将軍』を待ち、自ら積極的に解決しようとする自助能力（国土国民を自らの力で守る）を全く無くしてしまっている。

次の童謡は子供用に作られたものが、現在では大人も歌い味わってもらわなければならないようである。

『待ちぼうけ』（作詞：北原白秋　作曲：山田耕筰）

①待ちぼうけ待ちぼうけ　ある日せっせこ野良仕事
　そこへ兎が飛んで出て　ころり転げた木の根っこ
②待ちぼうけ待ちぼうけ　しめたこれから寝て待とうか
　待てば獲物は駆けてくる　兎ぶつかれ木の根っこ
③待ちぼうけ待ちぼうけ　昨日鍬とり畑仕事
　今日は頬づえ日向ぼっこ　うまい切り株木の根っこ
④待ちぼうけ待ちぼうけ　今日は今日はで待ちぼうけ
　明日は明日はで森のそと　兎待ち待ち木の根っこ
⑤待ちぼうけ待ちぼうけ　もとは涼しい黍畑
　いまは荒れ野の箒草　寒い北風木の根っこ

⑤節の詩にある黍畑とか箒草からみても
これは満州の伝説から採ったものであり、
大正15年教育会用童謡として、当時の
新進気鋭な童謡作家が作ったものである。

古人曰く“天は自から助くる者を助く”

本年もよろしくお願いいたします。